

# IUMS Sapporo 2011 の Mycology 部門を担当して

(IUMS 国内組織委員会委員) 三上 襄

富田房男先生を中心としたIUMS招致委員会で札幌に国際微生物連合会議を招致することとなり、その準備が開始された。その後、札幌への招聘が決定して、国際微生物連合2011会議(IUMS Sapporo 2011)の準備のために新たな組織委員会が立ち上がった。その前後のIUMS Sapporo 2011の全体の流れは本会議の組織委員長の富田先生から報告されることになっているので、ここでは小生が担当したMycology部門(真菌部門)について、プログラムの作成から、講演者の招聘、さらにその後の会議の開催まで実際に経験したことを、今後再度日本で開催された場合の参考になればと思い述べてみたい。

IUMS会議の招致委員とは別にIUMS Sapporo 2011の設置委員として、新たに八木澤守正先生、平山壽哉先生と小生が任命され(2009年1月)、組織委員会が発足した。その他BAM部門のプログラム関係では笹川千尋先生と清水 昌先生、Virology部門関係では永田恭介先生、Mycology部門では、亀井克彦先生がそれぞれのプログラム委員として選出された。さらにMycology部門プログラム委員会のメンバーとして医真菌学会から西川朱實先生、菌学会から中桐 昭先生が、また組織委員会からの推薦で安藤勝彦先生が参加されて、Mycology部門のプログラム作成に関する議論が開始された。

Mycology部門のSymposiumのトピックスについては、2002年のパリ(フランス)、2005年のサンフランシスコ(米国)と前回2008年のイスタンブール(トルコ)の例を参考に進めた。これらのトピックスを担当していただける学会として、菌学会、医真菌学会、キノコ学会、マイコトキシン学会、微生物資源学会、微生物生態学会から委員を推薦していただき、Mycology部門のプログラム委員会を立ち上げた(委員会の最初には、防菌防黴学会、植物病理学会からの委員も参加していただいた)。



写真1. 発表会場

そして、組織委員会の了解のもとにMycology部門のプログラム委員長として亀井克彦先生(千葉大、医真菌学会)が選ばれ、安藤勝彦先生(製品評価技術基盤機構(NBRC))、作田庄平先生(東大、マイコトキシン学会)、小西良子先生(国立医薬品食品衛生研、マイコトキシン学会)、宍戸雅宏先生(千葉大、植物病理学会)、鈴木彰先生(千葉大、キノコ学会)、高島昌子先生(理研、微生物資源学会)、高松 進先生(三重大、菌学会)、山本啓之先生(海洋研究開発機構、微生物生態学会)、中桐昭先生(NBRC、菌学会)、西川朱實先生(明薬大、医真菌学会)がそれぞれの学会からの推薦委員となって協力していただくこととなった。さらに、関係者と相談して奥田 徹先生(玉川大)、川本 進先生(千葉大)、町田雅之先生(産総研)にも委員として参加していただくことになった(なお、プログラム委員長の亀井先生が健康上の理由でプログラム委員長を辞退されたことから、最終的には小生が組織委員としての広報委員長とMycology部門のプログラム委員会の委員長を兼任することとなった)。

Mycology部門のプログラムを担当するにあたり、最初に検討すべき重要な課題としては、Plenary講演者の推薦、Symposiumタイトルの決定とSpeakerなどの推薦などがある。IUMSのプログラムの作成において、最後まで問題となったことは、これはBAM部門でも同様であるが、これらのタイトルや講演者についての決定権は、IUMS本部組織(IUMS Sapporo 2011とは区別)のプログラム委員長(BAM部門はDr. Elora Z. Ron, Tel Aviv University, Israel, Mycology部門はDr. Scott E. Baker, Pacific Northwest National Laboratory, USA, Virology部門は河岡義裕先生、東大)に属することであり、そのため現場の組織委員会の意向が迅速にプログラムに反映されないことも多くなり、その後のMycology部門のプログラムの作成にも大きな問題となった。最初に問題となったことは、日本のMycology部門プログラム委員会から推薦されたPlenary Lectureの講演者について、IUMS本部組織が難色を示してきたことである。これに関しては、当時事務局長であった八木澤守正先生(慶応大)と相談して、その講演者の優れた業績を強調するなど組織的に対応することにより日本の意見を通すことができた。また、それぞれのSymposiumにおいて、ConvenerやSpeakerについても、IUMS本部組織のDr. Bakerからの個人的なと思われる推薦があり、日本側の担当者との調整が大変なことも多くあった。特に、各Symposiumにおいてプログラム委員等がConvenerとなり、Symposiumを計画しており、それぞれの先生には

推薦母体の学会からの意向と IUMS 本部組織からの考えが異なった場合も多くあり、講演者の人選についてはプログラム委員の先生にかなり負担をおかけしてしまった。また、IUMS 本部組織からの希望の演題に関して日本での研究者が少ない場合もあって、関係者に連絡をして無理に Symposium の計画をお願いした Session もあった。

さらに大きな問題となったことは、日本においても景気の後退が響き、会社などからの支援がきわめて厳しい状態が続き、IUMS Sapporo 2011 の開催に必要な資金についても、募金委員の先生がたの懸命の努力にも拘わらず集まりが悪かった。そのため、BAM, Mycology, Virology のいずれの部門の Symposium においても、外国人の Convener (Chairperson の場合も) だけの参加費の支援を行うだけで、他の招聘者には IUMS Sapporo 2011 本部からの支援は一切行われなことが決まった。組織委員会の初期の予算においては Symposium の Convener や Speaker には、参加国の地域によって違いはあるが、ある程度の謝金を含めた金銭的な支援があることが決められていたが、その後予期せぬ災害 (3.11) が起きたこともあり、結果的に Symposium への支援はほとんどできないこととなった。プログラム委員長として、各講演者などへの支援がまったくなくなったことを各学会の担当者に理解していただくにはかなりの時間が必要であった。もともと小生の関係する学会に対しては、本部からの支援は最初から期待できないので、学会独自の支援体制を前もってお願いしてあったが、それでも突然の IUMS-Sapporo 2011 本部の方針の変更は大きな混乱を招いた。すでに計画が動いていたので Mycology 部門でも Symposium では、それぞれのプログラム委員の先生が所属する学会が独自で支援をしていただく以外に方法はなく、委員の先生方にはご迷惑をおかけした。しかしながら、学会によっては2つのランチョンセミナーを開催していただいたり、また少人数の学会にも拘わらず、その財政規模から考えてもその後の学会の運営に問題を残すと思われるほどの支援をしていただいた学会もあり、本当に頭の下がる思いであった。Mycology 部門では IUMS 本部組織の意向で学会の支援が期待できない Symposium も提案された。これらの Symposium では当然ながら担当学会はなく、学会の支援が期待できず担当者にご苦勞をおかけしていたが、富田委員長への支援であった (財) 発酵研究所からの寄付金を回していただくことができた。もともと、財政基盤が弱い Mycology 部門については組織委員会で議論をしていただいたので、これらの資金を Mycology 部門支援に重点的に回していただくことを決定していたので、これらの Session の支援に回すことができた。

前にも例を挙げたが、Mycology 部門 (他の部門も同様) のプログラムの作成に関して決定権を持つのは IUMS 本部組織 Chair の Dr. Baker であり、Plenary Lecture

の問題以外でも、各 Symposium Session のタイトルや Convener, Speaker の選定をいちいち相談する必要があり、最初はかなり険しいやりとりとなった。相手も IUMS 本部組織の Chair は最終決定の権限を持つことを示すために、意識的に IUMS の規定書類を送ってきたり、かなり緊迫したこともあった。しかし、主張すべきことは何度も主張して、お互いに議論しあうことで、いつの間にか共通の認識を持つようになり、また相手も日本側独自でプログラムの作成を問題なくできることを認識してくれたせいか日本側の意見を尊重するようになった。そのため、それ以後はプログラムを作成するためにお互いの調整がうまくできるようになり、メールでの厳しい争いもなくなった。

Mycology 部門では、さらに多くの先生方の個人的な協力があった。中でも集まったアブストラクトについては、それぞれの部門で独自に審査をすることになっていたが、Mycology 部門では、柿島 眞先生 (筑波大) に査読に関する委員会を立ち上げていただいた。委員会の構成員は以下の通りであった (委員長: 柿島 眞先生, 副委員長: 高島昌子先生 (理研), 矢口貴志先生 (千葉大), 西川朱實先生 (明薬大), 奥田 徹先生 (玉川大), 細谷剛先生 (国立科学博物館), 森永 力先生 (広島県立大), 高松 進先生 (三重大), 作田庄平先生 (東大))。

さらにそれぞれの部門については、若手参加者への支援が行われることになり、Mycology 部門における候補者の選考は査読委員会の委員長の柿島 眞先生と副委員長の高島昌子先生をお願いした。二人においては、お忙しいところ、それぞれの応募者について、応募国の経済状態や日本の指導者との関係などを点数化した制度を考案していただき厳格に決定していただいた。

これらの先生方も含めて最終のプログラム委員はプログラム集に掲載された方々である。

プログラムの作成中に、IUMS 組織本部の Secretary General の Dr. Robert A. Samson (CBS Fungal Biodiversity Centre) から、ComCofs 関連の Symposium を Mycology 部門が担当するようにとの依頼を受けた。しかし、ComCofs については小生も不慣れなこともあったため、IUMS 本部組織との間で険しいやりとりもあったが、最終的には ComCofs 主催の3つの Mycology 関係の Symposium を無事開催することができた。ComCofs に関係している日本の関係者もおられるので、その先生方に担当をお願いして進めればよかったと反省している。

準備期間中には、3.11 という予期せぬ災害もあり、組織委員会においては、会議の中止を含む厳しい議論があった。しかしそれらに対して富田組織委員長の確固たる信念が表明されたことから、最後は組織委員が一丸となって活動して会議を成功裏に進めることができた。このような大きな国際会議の開催におけるリーダーの重要性をより強く感じた国際会議でもあった。